

事後評価報告書(日南ア研究交流)

1. 研究課題名:「代謝生化学と分子遺伝学の統合によるマラリア/HIV 克服を目指した有用南アフリカ固有植物の創成」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:大阪大学大学院工学研究科 教授 村中 俊哉

2-2. 南アフリカ側研究代表者:プレトリア大学 自然科学・農学部

教授 Jacobus Johannes Marion Meyer

3. 総合評価:(B)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

南アフリカ固有の植物を用いて、重要感染症であるマラリア、HIV 克服に有効な成分を日本・南アフリカ間の共同研究でスクリーニングするというアイデアは大変興味あるものであり、その成果はこの分野の研究の推進に大いに貢献すると考えられる。実際に抗マラリア活性を有するアルテミシニンの生合成経路の解明が進行した点、抗 HIV 活性を有するアフリカ起源植物を見出した点は評価できる。一方、まだ完全にアルテミシニンを産生する系は確立されておらず、実際に抗マラリア活性を有する物質を産生する系の確立を期待したい。また、アフリカ産植物の医薬品としての種の保存は重要であり、データベースのみならず実際に種子の保存、バンクの設立などの実務的な進行状況について、報告書に記載があると良かったと思われる。

(2)交流成果の評価について

南アフリカ固有の植物資源に詳しい南アフリカ側研究者と、植物二次代謝遺伝子に詳しい日本側研究者との共同研究として評価できる。しかしながら、セミナー、ワークショップが1回ずつであり、また人的交流について充分でない点は惜まれる。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

多くの研究施設で共同研究がなされており、成果の公表が待たれる。日本側の参加組織がやや多いが、緊密な連携がとられているようで問題はない。